

白鷹町所蔵 梅津五郎作《秋》の保存修復

中右恵理子 NAKAU. eriko／文化財保存修復研究センター専任研究員・講師

長峯朱里 NAGAMINE. akari／文化財保存修復研究センター嘱託研究員



図1. 修復前



図2. 修復後

第一章 作品概要

- 作 者：梅津五郎
- 作品名：秋
- 制作年：昭和21年（1946年）
- 寸 法：910mm×1165mm 50号 F型
- 材質技法：油彩／画布
- 署 名：黒色絵具 画面右下「Y.TAKEDA」
- 付属品：額
- 額寸法：1350mm×1110mm×75mm

第二章 損傷状態

ワニスの塗布むらによる光沢の違いが生じている。画面全体に亀裂の発生が著しい。特に空の部分に多く発生している。また、木枠の角に近い画面周縁部に剥落が多く生じている。本作は張りしろにも絵具が塗られているため、木枠の角の折れ部分に負担が生じ、剥落につながっていると考えられる。画面の左上の端近くには亀裂と剥落が密集して生じている。この部分に湿りなどの物理的な負担がかかったためと考えられる。左下角付近に白色の塗料のような付着物が認められる。左上

の山と空部分に2箇所補彩と思われる箇所がある。画面の絵具層の剥落箇所には、支持体の麻布が見えている箇所が多く、地塗り層から剥落していることがわかる。また、張りしろ部分の剥落箇所にもほぼ麻布が見えており、剥落のほとんどは地塗り層から生じていると考えられる。

画面側の上辺左側に幅1cm、長さ3cmほどの破れが木枠の角付近に生じていたほか、画面の下方中央付近に小さな穴が生じていた。ほかに下辺の張りしろの左側に長さ5cmほどのL字型の破れが生じていた。張りしろ部分には、釘穴や小さな破れなど損傷が目立った。支持体の麻布は酸化劣化して、褐色化、脆弱化が進んでいるように思われる。柔軟性がなく破れやすい状態である。裏面には油絵具かワニスが染みて生じたような褐色のしみが多く生じている。また、地塗り塗料のような黄白色の付着物が所々に見られた。

支持体の麻布は波打ち状に変形しており、とくに画面の下方に凹凸の変形が著しく認められる。木枠に張られた状態での緩みが認められ、絵具層が厚塗りのためもあってか、画面の下方に弛みが

生じ、変形につながったと考えられる。木枠の幅に沿った亀裂の発生と変形も認められる。張りの緩みからキャンバスが木枠に接していた状態であったため、木枠に当たって亀裂、変形が生じたと考えられる。

木枠には擦傷や凹み傷が所々に見られた。凹み跡は木枠の四辺全体に認められ、キャンバス張り器の跡であると考えられる。

第三章 処置方針

作品の状態などの観察から、以下の処置方針を立てた。

- ・白鷹町に寄贈された梅津五郎の作品を、長期的に安定した状態で保存できるように構造上の強化を行う。
- ・定期的な作品の展示のために、鑑賞の妨げにならない程度に美観を整える。
- ・作品の保管に適した額装とし、作品保護のための裏蓋を取り付ける。保存箱は中性紙製のものにする。
- ・作品のオリジナリティーを尊重し、出来る限り既存の材料を再使用し、過度の変更は行わない。
- ・修復材料は将来的に除去可能な可逆性のあるものを使用する。

第四章 修復処置

処置方針を踏まえ、以下の処置を行った。

1. 修復前の写真撮影、状態調査を行った。
2. 亀裂や剥落周囲の絵具層の浮き上がり箇所を膠水を用いて接着強化した。
3. 裏面の埃汚れを筆、ミュージアムクリーナー、天然ゴムスポンジで除去した。
4. 亀裂や剥落周囲の絵具層の浮き上がり箇所を膠水を用いて接着強化した。
5. 側面の埃汚れを精製水で湿らせた綿棒で洗浄した。
6. 画面の埃汚れを精製水で湿らせた綿棒で洗浄した（図3）。
7. 画面の周縁部にポリエステル紙とクルーセルを用いて養生した（図4）。
8. 支持体の変形箇所に、ゴアテックスを用いて裏面から湿りを入れ、画面側からプレスして変形修正を行った。
9. 木枠をミュージアムクリーナー、天然ゴムスポンジで清掃した。
10. 木枠の割れ部分を膠水で接着強化し、欠損部

にエポキシ樹脂系の木材用パテを充填し整形した。

11. 釘穴を木粉と膠水、メチルセルロースの混合物で充填した。
12. 支持体の補強のため、ステンレス製ステーブルで、ポリエステル布を予め木枠に張り込んだ（図5）。
13. 支持体裏面の付着物をメスで削り、裏面を平坦にした（図6）。
14. 画面の破れ、穴の箇所麻布を嵌め込み、膠水で接着して補修した。
15. 張りしろの破れ箇所に、ポリエステル不織布をBEVAフィルムで貼り補修した。
16. 作品の張りしろ裏面に、麻布をBEVAフィルム接着材で接着し、張りしろを補強した。
17. 作品をポリエステル布の上から木枠に張り戻した。使用可能な釘は再使用し、痛みの激しい釘は新規のステンレス製キャンバス釘に変えた。
18. 絵具層の欠損部分に、石膏と膠の充填材を筆で塗布し、乾燥後メスなどで削り、周囲に合わせて整形した。
19. 充填箇所を、周囲の色に合わせて、水彩絵具とアクリル樹脂絵具で補彩した。
20. ミュージアムクリーナー、天然ゴムスポンジで額の清掃を行った。
21. ステンレス製T字金具で作品を額に固定後、ポリカーボネート板を裏蓋として取り付けた。
22. 強度の高いケブラー繊維の吊り紐を新調した。
23. 修復後の写真撮影を行った。

第五章 まとめ

画面全体に生じていた亀裂を接着強化し、作品を安定して保存できるようになった。また、支持体に生じていた変形を修正し軽減することができたことで、新たな亀裂や剥落の発生を防ぐことができ、作品を鑑賞する上でも見やすくなった。支持体の破れや穴を補修し、構造的に強化を図るとともに、欠損箇所を充填・補彩することで美観を回復した。



図3 画面洗浄

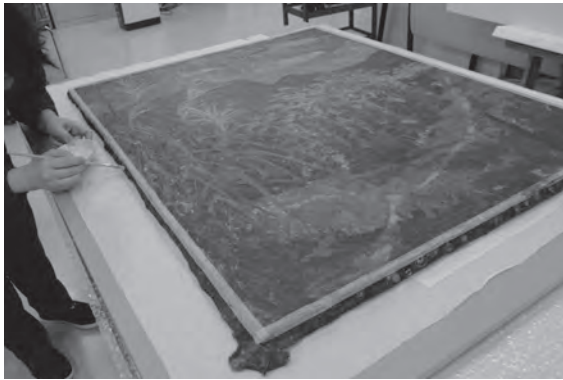


図4 周縁部の養生



図5 ルースライニング



図6 付着物除去